

# 诗

# 2

2023

黄与绿画(局部)



# 鳩の湖

能村 研三

百日荒行

稿屑をを丸めて抛る漱石忌

冬耕の畑直線に狂ひ無し

垂直に穴掘ることも冬用意

ことごとく枯れ人間は枯れ遅る

乾反りては土に馴染まぬ朴落葉

考へる時間が欲しき鳩の湖

雪来るか津軽三味線高鳴れば

鰻鮎屋に相席願ふ討入り日

雪の夜の顎に挟みしバイオリン

寒鰯を切るや入日の能登が見ゆ

一月三日、家族と一緒に中山法華經寺に初詣に出かけた。法華經寺は家から2キロ程の位置にある身近なお寺だが、鎌倉時代に創建された日蓮宗の大本山の由緒ある寺院である。日蓮の書跡『観心本尊抄』、『立正安国論』などの国宝もあり、境内建造物の多くは重要文化財に指定されている。

また法華經寺境内には大荒行堂があり、毎年十一月一日から翌二月十日までの百日間、全国から百人を超える僧侶が集まり、厳しい規則に従い、厳寒の季節に白木綿単衣又は法衣のみの着用で荒行がおこなわれる。

荒行僧の一日は、午前二時に起床し、早朝三時、一番の水から午後十一時まで一日七回、寒水に身を清める水行と、『万巻の読経』『木剣相承』相伝書の書写行があり、朝夕二回、梅干し一個の白粥の食事の生活が続く。

能村家の菩提寺である谷中の延壽寺の若住職竹内焯陽さんも、初行の僧都（筆頭代表）として荒行を務めてお

られる、コロナ禍もあって三年越しとなった入行であるが、この寒さの中に修行を積まれているのだ。

先般、法華經寺に初詣で行った時、裏山にある聖教殿にお参りをしたが、午後三時の修行の時間であったのか荒行堂からは修行僧のお経を唱える声が聞こえてきた。この中に焯陽さんもおられるのかと思うと感謝と功德の気持が一杯となった。

満行が近くなる一月の終わりには檀家の方々と荒行堂にお見舞いに行くことが予定されている。

また二月の節分の追儺式には、しっかりと髪を蓄えた修行僧による豆まきも行われ、修行で鍛えた嗚び声によるお経が唱えられる。

二月十日の成満会は荘厳な雰囲気の中執り行われるが、出迎えはまだ夜も明けきらない早朝の寒い時にはじまるので、荒行を成満した僧侶の苦勞を体感できる貴重な時間である。

寒行の嗚声の中の澄みし声 登四郎  
しづかなる寒行僧の徒跣足 研三

能村 研三

一村の目覚めのやうに白鳥来  
義士の日の三面記事を漁りをり  
来客に居留守を使ふ漱石忌  
山眠る銀に栄えし町廃れ  
獺期来る山家に大き達磨据ゑ  
熊撃の湯ぶねで語る背の傷  
狼が来るかも今日の山の音

玄関の前に添え木二本で支えられた梅の木がある。大木という感じではないが相当の老木である。根本は四十七センチ余りあり年輪を重ねて太ると言うより、年々痩せてゆく感じである。暮れに庭師が入り「よく見ろ」と言う。自分の都合か庭の都合に合わせて、予期せぬ時にやって来ては庭の手入れの悪さを叱り、刈り込んだ枝葉の後始末を私に命令する。梅の木は日向の方こそ樹木の姿をしているが、裏に回れば太い幹の半分以上が空洞で、捻れている所は皮一枚という感じで骨と思しきものが無い。空洞に何かを詰める手もあるが、却って何もかもは出来ず、今回は腐りかけている添え木一本を替えた。

それでいて、梅は時となれば馥郁たる香の花を咲かせ、立派な実を沢山付けてくれる。以前に登四郎先生ならば、このような老木の梅を詠んだ句があろうと探してみたが見つからず、へ紅梅のまなじりつよく開きけり」という御句があった。それに刺激された訳ではないが私もへ老梅の気迫の白と思ひけり」と詠んでみた。

## 濤声集

一度だけ

千田百里

冬帝の引つ張り上げし六三四かな  
にはとりのここここよと小六月  
\*浮世とはどんな世かしら餅を焼く  
手編みセーター夫への愛は一度だけ  
甚六に肩を揉まれて小晦日  
寒月光青春浪費したる日の

転生の途中

辻美奈子

プロッコリー一致団結して昏し  
\*転生の途中海鼠として休む  
竜王の蓮枯ること許されず  
切々と零れのこして式部の実  
冬の霧盆地をひとつ湖に  
消えかかる冬虹の根を竜が引く

# 蒼茫集

水のやうな空

大沢美智子

立ち上る炎は炎を制し牡丹焚  
義経伝説ここぞ竜飛の風しまく  
雫のやうに降り来る白鳥家族かな  
隈笹に雨来る早さ葉喰  
\*開戦日いちにち水のやうな空  
年惜しむジントニツクに銀座の灯

鷹放つ

広渡敬雌

\*罪を消すやうに山茶花散りしきり  
綿虫は淋しい人に近づきぬ  
夜廻りにわくわくついて来る子かな  
ほどほどに噛んで海鼠を呑み込めり  
ふるさとにうから減りたる粥柱  
押ししかへす力を腕に鷹放つ

火種

細川洋子

\*ぐんぐんと螺旋昇りに鷹渡る  
鷹の目の火種を蔵す冷たさよ  
鈴の音のまどかに少女鷹放つ  
大年の海へひかりの帯伸ばす  
曜変天目寒星を蔵しをり  
埋み火や津軽じよつぱりふつふつと

格天井

平松うさぎ

\*山河には山河の支度蔦かづら  
北国の迎へ討つ冬来りけり  
閻魔帳開く烏瓜の真つ赤  
格天井に寄進の百花冬うら  
波立って紙生るるや冬銀河  
ぶらりふらり冬烏瓜の虚空

# 飛鷹選評



能村 研三

水鳥やひかり目映き鳩の海

長山 正子

高浜虚子の句で、へ鳩がゐて鳩の海とは昔よりという句があるが、鳩の海は琵琶湖のことを言い、昔から詩歌にもよく詠まれてきた。琵琶湖には鳩鳥をはじめ多くの水鳥が生息している場所である。鳩は何といても長時間潜水できるところにその特徴があり、潜ったり、浮かび出た時に湖面にはさざ波が生まれてひかりが目映く光る。

追熟とふ晩節ありや冬籠

吉村さよ子

追熟は果物を収穫後、一定期間置くことで、甘さを増して果肉をやわらかくすることを言うが、作者はご自身が今熱心に俳句に打ち込んでいる姿を詠んだものなのだろう。俳句もすぐに上達するものでなくじっくりと詩心を熟成させなければならぬ。冬籠をしながら句作に励む充実した晩節を過ごされているのだろう。

つぶやきは祈りとなりて寒の星

西井薫美子

冷たい空気に冴え冴えと光る星がよく見える。夜空を見上げてオリオン座などの星座に指差す人もいれば、静かにただ見上げる人もいる。寒星は一層生き生きと光っている感じで、よく見るとそれぞれの光の量、色、瞬き方で違っている。何か夜空に向かってつぶやきを発してしまったようだが、それは寒星への祈りだったのかも知れない。

腕立て伏せ冬なんのそのなんのその

井上 竜太

井上竜太さんは「沖作品」の投句者で一番若い方、お住まいは芦屋市で本部からは遠いが、ズーム句会に参加されているので、画面を通して親しくお話をしている。寒い毎日でも日課としている腕立て伏せ。「なんのそのなんのその」と白らを励ましなが腕立て伏せを繰り返しておられるのだろう。

動くもの動かざるもの山眠る

青木 幹晴

生気をなくし枯色から無彩色となり、或いは雪山となつてあたたかも眠っているような冬の山。そんな静かな山にすでに冬眠をしている生き物もいれば、ひそかに動いている生き物たちもいるのである。

冬晴や百の地蔵の百の貌

中谷 恭子

この句を読んで、お地蔵様というより、様々な表情の五百羅漢の姿を思い浮かべた。笑うものあり、泣くものあり、怒るものあり、ひそひそ話をするものあり、本当にさまざまな表情をした羅漢様には百の貌がある。

海鼠腸と能登の海鳴りすすりけり

竹田 絹子

海鼠腸は海鼠の腸の塩辛で、酒の肴として親しまれている。私も能登を旅した時に土産に買って帰ったことがあるが、海鼠を嚼む時、能登り海鳴りが聞こえてきそうな気がした。

# 潮鳴集

深海魚 中村重幸

\* 木枯は別の世のこと深海魚  
ゴミを出すいきものが人文化の日  
雲の濃き十一月の出雲かな  
老木の夢のひとひら返り花  
大男小股に歩く寒さかな

枯木立 澤田英紀

静寂を誘ふ茶の花日和かな  
悠久を刻みし月の冴えにけり  
笑ふ目に少し殺気の十二月  
\* 枯木立嘘つく顔に向き不向き  
敬称を略す如くに枯木立

浄衣 古居芳恵

新校舎のカラー予想図小鳥来る  
\* まぶしさの霧氷の浄衣八甲田山  
みちのくの空の変幻あられ来る  
掛大根お岩木山の風を入れ  
和風ポトフ京人参の小口切り

やさしく 稗田寿明

山茶花のちぎり絵のごと散つてをり  
茶の花の蕊から日向ひろごれり  
シャガールの抱き合ふふたり冬銀河  
オリオンの天頂に座す帰り道  
\* 「むずかしいことをやさしく」十二月

ふくろふ 坂本緑

\* ふくろふの夜を引き裂くことありぬ  
重大な何かに気づくしづり雪  
マフラーに自愛の文字の隠れたり  
凍滝こりたきに微かに動く人の列  
履物を提げて通りぬ雪女

仮駅舎 須賀ゆかり

\* 淋代は波散るばかり秋惜しむ  
連絡船へ遺構のレール雪催  
見送れる人よ初冬の仮駅舎  
静けさや寒月欠けてゆく時間  
藁塚のくづれ日差しを含みつ

日暮 広海めぐり

\* かいつむり水の中にもある日暮  
大伝馬町に京屋近江屋時雨けり  
ポインセチア次の言葉を探しみる  
湯の宿の落葉湿りの灯の揺らぐ  
瑕疵深し武甲山崇むる冬太鼓

母いつも 兵藤恵

\* 雪来ると土偶はこ糸を上げにけり  
にほとりの当てずっぽうに浮いて来し  
母いつも私を待ちて日向ぼこ  
駅から駅へ傘は使はぬ初しぐれ  
コピー機を洩れ来る光クリスマス

階段の手摺 大森春子

団欒にゆつくりひらく冬薔薇  
凧の二号に乗つて来たといふ  
\* 階段の手摺冷たき開戦日  
夕刊に実朝の歌冬銀河  
梟を我が子のやうに語りをり

淋代 栗坪和子

\* 寒さうな貌淋代の雀らは  
夕風のことに津軽の芒原  
弘前の城と親しみ落葉踏む  
河豚鍋の箱階段をのぼりくる  
老獵夫シベリアのこと少し言ふ

# 沖作品



## 能村研三選

晩秋や江戸の名残の蔵のカフェ

千葉

長山 正子

無患子の色深まるや一茶の碑

\* 水鳥やひかり目映き鳩の海

風立ちて順ふままの枯尾花

呼びとめて他人の空似冬帽子

落花生ぼちぼち剥きて明日のこと

\* 追熟とふ晩節ありや冬籠

玉子割る十一月の明るさに

松手入れひと日かすかな鉄音

粥吹けば木の葉時雨となりにけり

聞き上手忘れ上手や日向ぼこ

\* つぶやきは祈りとなりて寒の星

山茶花咲き二人ぐらしの間合ひかな

のんのんと齡を重ねセロリの香

市川市

西井薫美子

吉村さよ子

彼方から拍手喝采山眠る

兵庫

井上 竜太

一面にあかるき見出し十二月

\* 腕立て伏せ冬なんのそのなんのその

加湿器の水抜いて水注ぎけり

縁側に切干丸く座を占むる

神鬼稚児の眠りて舞ひ初むる

吉良さまへ靡く香煙十二月

合はす手に風花の舞ふ高野道

\* 動くもの動かざるもの山眠る

\* 冬晴や百の地蔵の百の貌

縦のもの横にもしない着ぶくれ

浜千鳥啄木の碑は海を向く

「おやすみ」で終へる一日寒の星

青森

中谷 恭子

愛知

青木 幹晴